

グレーゾーン研究による 新たな問題の発見

「グレーゾーン」とは、物事の中間の曖昧な領域を指す言葉である。この数年、日本上海史研究会と中日文化協会研究会は戦時期上海のグレーゾーンについて共同研究を進めており、すでに『史潮』新七八号（歴史学会、二〇一五年）と『戦時上海のメディア』（研文出版、二〇一六年）にその成果を発表してきた。本書はその第三弾の本格的共同研究である。

本書は、「Ⅰ「政治・経済」〈抵抗〉と〈協力〉のダイナミクス」、Ⅱ「社会・文化」日本統治下に生きる」、Ⅲ「言論・メディア」戦時上海を語る〈声〉」の三部により構成されている。

第Ⅰ部は五本の論文と二本のコラムからなる。関智英「上海を統治する」は、汪兆銘政権を「グレーゾーンの揺籃」と位置づけ、同政権の性格を検討している。藤田拓之「戦時下における上海共同租界行政」は、戦時下に共同租界の実権を

堀井弘一郎・木田隆文編
アジア遊学 205

戦時上海グレーゾーン
溶融する「抵抗」と「協力」



A5判 240頁
勉誠出版
[本体2400円+税]

石島 紀之

めぐる日英の主導権争いが激化し、太平洋戦争の勃発によりイギリス人の支配は終わりを告げたと述べている。高綱博文「中支那振興株式会社とは何か」は、中支那振興会社の子会社として成立した華中蚕糸公司の分析を通じて、日本の軍官民が一体となった経済侵略の実態を明らかにしている。菊池敏夫「日中戦争期の上海永安企業における企業保全」は、永安企業（百貨店・紡織業）がイギリス・アメリカへの登記により日本軍の工場軍管理に対抗し、アジア太平洋戦争勃発後は汪政権に協力して企業の生き延びを図ったと述べている。上井真「劉鴻生の戦時事業展開」は、マッチ・セメント・毛織物などの企業家劉鴻生が人脈を生かして戦時下に香港と重慶で新規事業を展開し、上海では日本への「協力」により事業継続を図ったと論じている。武井義和「朝鮮人コミュニテイ」

(コラム)は、上海の朝鮮人社会のなかに戦争協力でも反日でもないグレーゾーンが存在したと述べている。今井就稔「経済史の視点からみた戦時上海の『グレーゾーン』」(コラム)は、「国家の論理」の思惑をこえた「経済の論理」の存在としてグレーゾーンの課題をとらえることができる論じている。

第Ⅱ部は四本の論文と三本のコラムからなる。岩間一弘「日中戦争と洋食・洋菓子文化」は、国際都市上海では戦時期中も洋食・洋菓子文化が衰退しなかったこと、また食品企業家洗冠生が重慶など内地と上海で営業を続けたとの史実を紹介している。広中一成「上海に生きた東亜同文書院生」は、日本の中国侵略が始まる前後での東亜同文書院生の日中提携の理想と侵略の側に立っている現実との乖離を描いている。川邊雄大「日本人居留民と東西本願寺」は、上海における本願寺を中心とする日本仏教について、第一次上海事変以後、日本仏教の活動は居留民や日本軍将兵を対象としたものが多くなり、中国人信者は皆無となったと述べる。石川照子「上海の日中キリスト教ネットワーク」は、日中戦争期に上海日本人YMCAとYWCAの姿勢が戦争への妥協から協力へと変化したことを明らかにしている。鈴木将久「上海自然科学研究所と陶昌孫」(コラム)は、医学者で文学者だった陶昌孫が表面的には日本に協力しながら、重慶・延安とも連絡をとる

など、戦時下上海の複雑な政治的關係の狭間で生き抜いたと述べている。大橋毅彦「上海画廊を通り抜けた画家たち」(コラム)は、一九四〇年に南京路に開業した上海画廊をめぐる中国人画家と日本人画家の屈折した心情を紹介している。呂慧君「内山完造と『大陸賞』」(コラム)は、『大陸新報』と日本大使館から褒章された内山完造について、褒章の理由である日中文化人との交流の面でも、内山は当局の「文化親善」を目的としたわけではないとみなしている。

第Ⅲ部は五本の論文と二本のコラムからなる。木田隆文「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業」は、武田泰淳の小説『上海の螢』を手掛かりに、同分会附属東方文化編訳館が日本の文化統治政策の一環として設立されながら、日中双方の文化人が交錯する接触空間(コンタクトゾーン)であり、同時に両者にとつてのグレーゾーンであったと論じている。晏妮「川喜多長政と戦時上海・中国」は、国際映画画人の川喜多には、公人として積極的に戦時の文化政策に加担した面と上海残留の中国映画人を保護した面の二重性があったことを明らかにしている。堀井弘一郎「『親日』派華字紙『中華日報』の日本批判」は、汪兆銘派の機関紙『中華日報』に對日批判の記事が頻出していたことに注目し、同紙における「抵抗」と「協力」のゆらぎ・交錯の存在を検証している。山崎

眞紀子「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱」は、読者との交流欄「信箱」において田村が古い因習に苦しむ中国人女性を応援したことを紹介し、それは「国家」を超えようとした田村の実践の軌跡だったとみなしている。渡邊ルリ「上海日僑管理処発行『導報』誌の中の日本人たち」は、同誌に執筆した内山完造・海野昇雄・林俊夫をとりあげ、彼らの文章に表現された「人間的揺らぎは、底流で戦時の『グレイゾーン』に通ずるものであろう」と述べている。竹松良明「戦時下上海の暗く寒い夜」（コラム）は、小説家阿部知二が戦争末期に上海に滞在したときの「重さと暗さ」に着目し、そこに戦時下上海における日本人の「グレイゾーン」の所在「を見出している。邵迎建「張愛玲と日本文化」（コラム）は、日本占領下の上海で人気女性作家となった張愛玲の日本観を紹介している。

以上が本書の内容の要約である。以下にグレイゾーンの定義、およびグレイゾーン研究としての本書の意義と問題点について述べよう。

高綱博文は「抵抗と協力の狭間にある忍従・隠遁という態度こそ、〈グレイゾーン〉である」と定義している（前掲『戦時上海のメディア』八頁）。この抵抗、協力、忍従・隠遁という言葉は、ポシエック・フーが提起した戦時上海の中国知識

人の三類型、resistance、collaboration、passivityによるものである。だがcollaborationを「協力」と訳すことには問題がある。文字通り「協力」の意味を表すco-operationとは異なり、collaborationには「占領軍への協力」・「利敵協力」という意味があるからである。したがってグレイゾーン研究においては、「ある目的のために心をあわせて努力する」（『広辞苑』という意味での「協力」ではなく、「コラボレーション」あるいは「利敵協力」などの言葉を用いるべきだろう。汪兆銘政権についても、本書では論者によって「対日協力政権」と「対日従属政権」という異なる呼び方がされているが、私は後者を用いるべきだと考える。

本書で明らかにされたグレイゾーンの実態と性格は分野によって相違がみられる。経済分野では、資本家・企業家のグレイゾーンの生き方について異なるパターンがあったことが明らかにされている。上井論文の劉鴻生と岩間論文の洗冠生は上海と香港・重慶などにまたがって事業を展開し、グレイゾーンをしたたかに生きた資本家の代表例である。菊池論文の永安企業はイギリス・アメリカに依拠し、あるいは汪政権に協力して企業の保全を図った上海残留資本家の一例である。高綱論文にみられる中国蚕糸業者は日本に屈従するか民族的抵抗をするかの選択を迫られており、グレイゾーンの存

在の余地はなかったと思われる。

文化・芸術の面では、日本と中国の文化人・芸術家との関係が分析されていて興味深い。晏論文がとりあげている川喜多長政は「日本の戦時文化政策を担う重要な一人」だったが、中国映画人に理解を示し、彼らに日本の映画政策に歩調を揃えることを強要せず、中国映画人も抗日的感情を越えて、個人的に川喜多を信頼していた。木田論文によれば、中日文化協会の編訳会の目指す文化交流は対等なものでなく、日本文化を無条件に中国に移入するための日本の文化政策の遂行機関であったが、同時に翻訳者である中国人に賃金を払い、彼らと学術交流を果たす場でもあった。竹松のコラムも、セント・ジヨンスズ大学での講義において、学生との間が「ゼロファンのような幕」でへだたれていたと阿部知二が感じていたことを紹介している。宗教面でも、石川論文は日本YWCAが中国YWCAとの「友好」・「親善」を試みたが、それは日本の国体と国策に奉仕するものであり、中国側に苦悩と葛藤を与えたことを明らかにしている。木田論文が指摘しているように、「支配／被支配の関係にある日本人／中国人が、非対称な関係の下で文化接触を行う」コンタクトゾーンとグレイゾーンが存在したのであり、この日中知識人間の交錯した関係を明らかにしたことは、本書のグレイゾーン研究の成果の

一つである。

本書で残念なことは、古厩忠夫のいう上海に残された「瀨戸際の民衆」を扱った専論がないことである。「一般情報」という文献（上海市檔案館所蔵）は、「下層階級は終日、一日三度の食事をどのように解決するか、どのように物価の大幅な急騰と物資の極度の欠乏に対処するかを思いめぐらしており」、一九四三年の日華協定の締結にも無関心だったと伝えているが（拙著『中国民衆にとつての日中戦争』研文出版、二二三頁）、これはグレイゾーンに生きた民衆の実態を示しているといえるだろう。他方、アウシュヴィッツのラーゲルにおける「灰色の領域」、つまり民衆の内部の敵（フリーモ・レイヴィ「溺れるものと救われるもの」朝日新聞出版）についてはどうだろう。戦時上海では、いわゆる「小漢奸」のなかにこれを見出すことができるのではなからうか。民衆の問題は史料の制約があり、実態の把握が困難であるが、これからの研究課題としてほしい。

本書はグレイゾーン研究が新たな問題を多く発見し、戦時上海史の多面的な構築に貢献できることを明らかにした良書である。今後、この分野の研究がいつそう進展することを期待したい。

（いしじま・のりゆき フェリス女学院大学名誉教授）